

「三月十三日」

《概要》 永州零陵県に上陸して市内探索。

■本文の部

十三日

平明、風稍殺、乃行。四十里、爲湘口關。人家在江東岸、湘江自西南、瀟江自東南、合於其前而共北。余舟自瀟入、又十里爲永之西門浮橋、適午耳、雨猶未全止。諸附舟者俱登涯去、余亦欲登陸遍覽諸名勝、而病體不堪、遂停舟中。已而一舟從後來、遂移附其中、蓋以明日向道州者。下午、舟過浮橋、泊於小西門。隔江望江西岸、石甚森幻、中有一溪自西來注、石梁跨其上、心異之。急索粥爲餐、循城而北、乃西越浮橋、則浮橋西岸、異石噓吸靈幻。執土人問愚溪橋、即浮橋南畔溪上跨石者是；鈇鋸潭、則直西半里、路旁嵌溪者是。始知潭即愚溪之上流、潭路從西、橋路從南也。乃遵通衢直西去、路左人家隙中、時見山溪流石間。半里、過柳子祠、「祠南向臨溪。」再西將抵茶菴、則溪自南來、抵石東轉、轉處其石勢尤森特、但亦溪灣一曲耳、無所謂潭也。石上刻「鈇鋸潭」三大字、古甚、旁有詩、俱已泐不可讀。從其上流求所謂小丘・小石潭、俱無能識者。按是水發源於永州南百里*₁之鴉山、有「冉」・「染」二名「二以姓、一以色」。而柳子厚易之以「愚」。按文求小丘、當即今之茶菴者是「在鈇鋸西數十步叢丘之上、爲僧元會所建、爲此中鼎刹。」。求西山亦無知者。後讀《芝山碑》、謂芝山即西山、亦非也、芝山在北遠矣、當即柳子祠後圓峯高頂、今之護珠菴者是。又聞護珠・茶菴之間、有柳子崖、舊刻詩篇甚多、則是山之爲西山無疑。余覓道其間、西北登山、而其崖已荒、竟不得道。乃西南繞茶菴前、復東轉經鈇鋸潭、至柳子祠前石步渡溪、而南越一崗、遂東轉出愚溪橋上、兩端〔架〕瀟江之上、皆前所望異石也。因探窟踞蓐、穿雲肺而剖蓮房、上瞰既奇、下穿尤幻、但行人至此以爲溷圍、污穢靈異、莫此爲甚、安得司世道者一厲禁之。〔橋內一菴曰圓通、北向俯溪、有竹木勝。〕時舟在隔江城下、將仍從浮橋返、有僧圓面而長鬚、見余盤桓久、輒來相訊。余還問其號、曰…「頑石。」問其住山、曰…「衡之九龍。」且曰…「僧即寓愚溪南圓通菴。今已暮、何不暫止菴中。」余以舟人久待、謝而辭之、乃返。

●校勘

* 1 百里 上海新整理本は「里百」。朱惠榮らが、乾隆本などにより乙正するのに倣い、改めた。

■訳注の部

●訓訳

十三日

平明、風稍々殺ぎ、乃ち行く。

四十里にして、湘口關たり。人家は江の東岸に在り、湘江は西南よりし、瀟江は東南よりし、其の前に合して共に北す。余が舟は瀟より入り、又た十里にして永の西門浮橋たり。適に午たるのみ。雨は猶ほ未だ全くは止まず。諸々の舟に附せし者は俱に涯に登りて去る。余も亦た陸に登りて遍く諸名勝を覽んと欲するも、病體堪へず、遂に舟中に停まる。已にして一舟後ろより来る。遂に移りて其の中に附す。蓋し明日を以て道州に向かふ者なり。下午、舟は浮橋を過ぎ、小西門に泊す。江を隔てて江の西岸を望めば、石甚だ森幻にし

て、中に一溪の西より來りて注ぐ有り、石梁其の上に跨る。心に之を異とす。

急に粥を求めて餐となし、城に循ひて北し、乃ち西して浮橋を越ゆれば、則ち浮橋の西岸なり。異石靈幻を嘘吸す。土人を執らへ愚溪橋を問ふに、即ち浮橋の南畔の溪上の跨石なる者は是れなり。鈇鋸潭は、則ち直ちに西すること半里、路旁の溪に嵌する者は是れなり。始めて知る、潭は即ち愚溪の上流にして、潭の路は西よりし、橋の路は南よりするを。

乃ち通衢に遵ひて直ちに西に去る。路左の人家の隙中に、時に山溪の石間を流るるを見る。半里にして、柳子祠を過ぐ。祠は南に向ひて溪に臨む。再び西して將に茶菴に抵らんとすれば、則ち溪の南より來り、石に抵りて東に轉ず、轉ずる處の其の石は勢ひ尤も森特なり、但だ亦た溪灣の一曲するのみにして、所謂潭なるは無きなり。石上に「鈇鋸潭」の三大字を刻す、古きこと甚し。旁に詩有り、俱に已に泐して讀むべからず。其の上流に従ひて所謂「小丘」「小石潭」を求むるも、俱に能く識る者無し。按ずるに是の水は、源を永州の南百里の鴉山に發し、「冉」「染」の二名有り「一は姓を以てし、一は色を以てす」。而して柳子厚之を易ふるに「愚」を以てす。文を按じて小丘を求むれば、當に即ち今の茶菴なる者は是れなるべし「鈇鋸の西數十歩の叢丘の上に在り、僧元會の建つる所たり、此の中の鼎刹たり」。西山を求むるも亦た知る者無し。後に《芝山碑》を讀むに、芝山は即ち西山なりと謂ふも、亦た非なり。芝山は北遠に在り。當に即ち柳子祠の後ろの圓峯高頂にして、今の護珠菴なる者は是れなるべし。又た護珠・茶菴間に、柳子崖有りて、舊刻の詩篇甚だ多しと聞く。則ち是山の西山たること疑ひ無し。

余道を其の間に覺め、西北して山に登るも、而も其の崖は已に荒れ、竟に道を得ず。乃ち西南して茶菴の前を繞りて、復た東に轉じて鈇鋸潭を経て、柳子祠の前に至り、石歩にて溪を渡る。而して南のかた一崗を越ゆ。遂に東に轉じて愚溪橋の上に出づ。兩端は瀟江の上に架かる。皆な前に望む所の異石なり。因りて窟を探り萼に踞し、雲肺を穿ちて蓮房を剖く。上に瞰れば既に奇にして、下に穿てば尤も幻なり。但だ行人此に至りては以て溷圍となし、靈異を汚穢すること、此より甚しと為すこと莫し。安くんぞ世道を司どる者を得て、一に之を厲禁せん。

橋の内に一菴有り、圓通と曰ふ。北に向きて溪に俯し、竹木の勝有り。時に舟は江を隔つるの城下に在り。將に仍つて浮橋に従して返らんとす。僧の圓面にして長鬚なる有り。余を見て盤桓久しくし、輒（すみやか）に來りて相ひ訊ふ。余還りて其の號を問ふに、曰く「頑石なり」と。其の住せる山を問ふに、曰く「衡の九龍なり」と。且つ曰ふ「僧は即ち愚溪の南の圓通菴に寓す。今已に暮なり、何ぞ暫く菴中に止まらざらんや」と。余舟人の久しく待つを以て、謝して之を辭し、乃ち返る。

●語注

○湘口關 「大明一統志」卷六五閩梁に「〔湘口關〕在瀟湘二水合流之處」とある。「永州」図などの後世の地図類にはその痕跡は見えない。

○永之西門 明代の永州府は、零陵（今の零陵区）に置かれていた。

○浮橋 小舟や筏をつなげた橋。訳者が二〇一四年に訪れた時も架かっており「霞客渡渡口」の名がつけられていた。

○道州 瀟江の上流に位置する。

○森幻 森は森羅（たくさん密集しているさま）、幻は奇幻（ふしぎなまぼろし）。

○心異之 景勝の地として有名な愚溪について、気がつかなかったとは、地理知識において博識な徐霞客らしくない。やはり体調不良が、影響しているのだろうか。

○異石嘘吸靈幻 諸訳と異なり、石が気を吐き、神妙な姿を見せている、と解した。

○鉗鉚潭 「大明一統志」卷六五永州山川に「鉗鉚潭」在西山之西。柳宗元記。」とある。池の名。鉗鉚は、火熨斗。池が火熨斗の形に似ているのでこの名がついたのだろう。柳宗元の散文集「永州八記」に「鉗鉚潭記」がある。他の七つは「始得西山宴遊記」「鉗鉚潭西小丘記」「至小丘西小石潭記」「袁家渴記」「石渠記」「石澗記」「小石城山記」である。

○嵌 池が溪流に接しているありさまを、「溪流に嵌め込む」と表現したのでろう。

○愚溪 「大明一統志」卷六五永州山川に「愚溪」在府城西一里。源出鴉山。舊名冉溪、

○柳子祠 「大明一統志」卷六五祠廟に「柳先生祠」在愚溪上。唐柳宗元謫居此。後人立祠祀之。宋汪藻記」とある。今も存し、柳宗元紀念館を兼ねている。

○森特 密集して飛び出している、と解した。

○溪灣 溪流の湾曲した場所。

○泐 音ロク。石の筋目に沿って割れること。

○小丘 「大明一統志」卷六五山川に「小丘」在鉗鉚潭西。柳宗元記」とある。「永州八記」に「鉗鉚潭西小丘記」がある。

○小石潭 「大明一統志」卷六五山川に「小石潭」在小丘西。柳宗元記」とある。「永州八記」に「至小丘西小石潭記」がある。

○鴉山 「大明一統志」卷六五永州山川に「鴉山」在府城南一百里。有怪石、望之似鴉」とある。

○鼎利 鼎鼎に、盛大なさま、の意がある。盛大に栄えている寺院。

○西山 「永州八記」に「始得西山宴遊記」がある。

○芝山 今の零陵区は、かつては芝山区といった。二〇〇五年に現在の名に改称。

○石歩 上海新整理本は固有名詞と考えている。石橋か、石を並べて川を渡るようにしている施設か。

○窟 洞穴ではなく、巖石の窪みや、岩と岩の間の空間であろう。

○雲肺 不詳。黄珮は訳さない。朱恵榮は、重なる雲のような石叢、と訳す。洞穴を肺に喩えるのは常道。洞穴の多い茅山は、地肺山の別名を持つ。巖石の窪みや隙間の比喩であろう。あるいは、愚溪橋の姿を喩えたか。そうであれば、「穿つ」は、橋の下をくぐる、ということになる。

而剖蓮房、上瞰既奇、下穿尤幻、但行人至此以爲

○溷圍 熟語はないが、溷は、便所。二語で、便所の意だろう。

○世道 社会の気風・風習。社会道徳。

○盤桓 ぐずぐずとためらうこと。

●口語訳

《5》零陵探訪

〔十三日〕

黎明に、風がようやく弱まったので、出発となった。

四十里で、湘口関である。人家が湘江の東岸にある。湘江が西南から、瀟江が東南から流れてきて、この関の前で合流して、一緒になって北流する（名は湘江）。私の乗る船は瀟江に入り、さらに又た十里で永州府城の西門の浮橋に着く。ちょうど正午だった。

雨はまだ完全にはあがっていない。同船していた人々は、みなここで上陸して行ってしまった。私も上陸して、零陵の名勝を観覧したいと思うのだが、病気で苦しむ体はそれに耐えられそうになく、やむなく船中に留まる。まもなく、一艘の船が、後ろからやってきたので、それに乗り移る。どうやら、明日に、道州に向かうものようである。

午後になって、舟は浮橋を通り過ぎ、小西門で停泊する。瀟江を隔てた西岸を望むと、巖石がとても密集していてまぼろしのようになっているところがある。その中から溪流が一筋、西の方から流れてきていて、瀟江に注いでいる。そこに石の梁が架かっている。心にとっても不思議に思った。

急いで粥を求めて食事をすませ、（上陸し）県城に沿って北へ向かい、瀟江を西に浮橋を越え、浮橋の西岸に着いた。怪異な巖石が、清浄で幻影的な「気」を呼吸し、神妙な姿を見せている。地元の人をつかまえて、愚溪橋のありかを問うと、あの、浮橋の南側で、溪流を跨いでいる石橋がこれであった。鉅鉚潭は、ここからまっすぐ西に半里の路傍にあって、溪流に接している池がそうである。そこで始めて知った、鉅鉚潭愚溪の上流に位置しており、潭からの路は西から東へ伸び、浮橋からの路は南から来ていたことを。

そこで、大路を真っ直ぐ西へ進む。路の左手の人家の隙間を通して、時折、石の間を山溪が流れているのが見える。半里で、柳子祠に至る。祠は南向きに愚溪に臨んでいる。さらに西に進み、茶菴に至るあたりで、溪流は南から流れてきていて巖石に当たり、東に向きを変える。その向きを変えるあたりの巖石は、密集して突出している。しかし、溪流がひとたび湾曲しているだけで、「池」というべきものではない。石の上に「鉅鉚潭」の三大字が刻されている。とても古いものである。旁に詩が刻されているが、石の表面が筋目に沿って割れており、文字は全く判読できない。

愚溪の上流に沿って進みながら、「永州八記」にある「小丘」「小石潭」を探し求めて聞いて回るが、誰も知らない。考えるに、愚溪は、その源を永州府城の南百里の鴉山に発止っていて、元々は「冉溪」「染溪」というふたつの名があつた「前者は、溪流に関連する人の姓に由来し、後者は、溪流の色に由来する」。そして柳宗元が「愚」と名前を変えたのである。柳宗元の文章から、「小丘」の位置を考えてみると、今の茶菴なるものがこれにあたるに違いない。「鉅鉚潭」の西に数十歩の叢丘の上にある。僧元会が建てたものであり、このあたりでは栄えている寺院である。「西山」を探し求めたが、こちらも知るものがない。後（翌十四日）に《芝山碑》を読んだところ、芝山こそが西山であると書いてある。しかし、これは誤りである。芝山はここから遙か北にある。おそらく柳子祠の後ろにある、なだらかな峯の高い頂上があるもので、今護珠菴という寺院が建っているところが、西山であろう。さらに、護珠菴のある峯と茶菴のある小丘の間に、柳子崖という場所があつて、古くから詩篇がとてたたくさん刻されていると聞いた。してみれば、護珠菴のある峯が西山であることは疑いがないと言えよう。

私は、ふたつの山の間にあるという崖を求めて、西北へ山を登ってみたが、その崖のあたりはもはや荒れ果てており、道も分からなくなっていた。そこで西南に向かい、茶菴の前を回って、東に向きを変え、鉅鉚潭を経由して、柳子祠の前に至って、石造りの施設を

通つて愚溪を渡った。そして南へ進み一崗を越える。さらに東に向きを変えると愚溪橋の上に出た。橋の両端は瀟江の畔に架かっている。これらは以前、対岸から望み見た怪異な巖石である。そこで岩の間を探索したり、花萼のような巖石に踞つたりする。その隙間は雲に穴を穿ったようであり、その巖石は蓮の花房を裂いたようである。上部を見上げれば奇景であり、下の隙間を見下ろすとても幻想的である。ただ、道行く人々がここに来ては用を足しており、神妙な場所を汚すこと、これよりひどいものはない。風俗を司るものは、なぜこうした振る舞いを一切厳禁しないのだろうか。

橋から陸側に菴が一軒ある。円通菴という。北に向きに愚溪を俯瞰しており、竹木の景勝がある。

時に、私の乗る舟は、瀟江を隔てた府城の麓にあった。そこで浮橋を使つて返ろうとした。すると丸顔で長い鬚を生やした僧侶がいた。私を見てしばらくためらっているようであつたが、すぐにやつて来たので、互いに挨拶をした。私が彼に呼び名を聞くと、「頑石」だという。住持するお寺を聞くと、「衡山の九龍寺だ」と言う。さらに「拙僧は、今、愚溪の南の円通菴に宿を借りています。もう日が暮れてきました。暫く菴中で休んで行かれませんか」と言ってくれる。しかし私は、船頭が長い間待っているから、として、彼に陳謝して辞去し、船に返った。

「三月十四日」

《概要》 零陵付近の景勝を探索。どうやらすっかり健康を回復しているようだ。先ず、まちの西にある芝山を探索。その後まちへ戻り、船が出発するというが、自分はそれと並行して陸路を進み、朝陽巖を探索。船頭から、早く船に戻ってくれ、と呼びかけられるも、あきらめきれず、探索を続ける。唐宋時代の石刻があつたが残念ながら時間切れであつた。船に乗る。それにしても、霞客は旅の同行者としては、まったくはた迷惑な人である。自分が景勝を見て回りたいがために、船頭や他のお客を待たせることに、全く罪悪感を覚えていないかのようだ。そのため、明日通過する澹巖については、船頭は「おまえさんをつつもりはない」と突き放す。そこで、船は行かせて、自分は探索しながら陸路で船に合流することとする。置いてけぼりの危険もある選択である。

■本文の部

十四日

余早索晨餐、仍過浮橋西、見一長者、余叩此中最勝、曰：「溯江而南二里、瀕江爲朝陽巖。隨江而北、轉入山崗二里、爲芝山巖。無得而三也。」余從之、先北趨芝山。循江西岸半里、至劉侍御山房「諱興秀、爲余郡司李者也」。由其側北入山、越一嶺、西望有亭、舍之不上。由徑道北逾山崗、登其上、即見山之西北、湘水在其北而稍遠、又一小水從其西來、而逼近山之東南、瀟水在其東、而遠近從之。瀟江東岸、又有塔臨江、與此山夾瀟而爲永之水口者也。蓋此^{*}、即西山北走之脈、更北盡於瀟・湘合流處、至此其中已三起三伏、當即《志》所稱萬石山、而郡人作記或稱爲陶家冲「土名」、或稱爲芝山「似形似名」、或又鑄崖歷亭、《序》謂此山即柳子厚西山、後因產芝、故易名爲芝、未必然也。越嶺而北、

從嶺上東轉、前望樹色掩映、石崖巒岈、知有異境。亟下崖足、仰而望之、崖巔即山巔、崖足即山足半也。其下有菴倚之、見路繞其北而上、乃不入菴而先披路。遙望巔崖聳透固奇、而兩旁亂石攢繞、或上或下、或起或伏、如蓮萼芝房、中空外簇、隨地而是。小徑由其間上至崖頂、穿一石關而入。有室南向、門閉不得入、繞其南至西、復穿石峽而入焉、蓋其側有東西二門云。室止一楹、在山頂衆石間。仍從其西峽下至崖足、一路竹木扶疏、玉蘭鋪雪、滿地餘香猶在。入崖下菴中、有白衣大士甚莊嚴、北有一小閣可憩、南有一淨侶結精廬依之。門在其左、初無從知、問而得之、猶無從進、〔僧〕忽從內啓扉揖入、從之。小庭側竇、穿臥隙而上、則崖石穹然、有亭綴石端、四窗空明、花竹掩映、極其幽奧。僧號覺空、堅留淪茗、余不能待而出。

仍從舊路、南至浮橋。〔聞直西四十里有寺曰石門山、最勝、以渴登朝陽巖、不及往。〕令顧奴從橋東溯瀟放舟南上：余從橋西、仍過愚溪橋、溯瀟西崖南行。一里、大道折而西南、〔道州道也。〕由岐徑東南一里、則一山怒而豎石奔與江鬪。逾其上、俯而東入石關、其內飛石浮空、下瞰瀟水、即朝陽巖矣。其巖後通前谿、上覆重崖、下臨絕壑、中可憩可倚、雲帆遠近、縱送其前。惜甫佇足而舟人已放舟其下、連聲呼促、余不顧。崖北有石蹬直下緣江、亟從之。蹬西倚危崖、東逼澄江、盡處忽有洞岈然、高二丈、闊亦如之、亦東面臨江、溪流自中噴玉而出、蓋水洞也。洞口少入即轉而南、平整軒潔、大江當其門、泉流界其內、亦可憩可濯、乃與上巖高下擅奇、水石共韻者也。入洞五六丈、即匯流滿洞。洞亦西轉而黑、計可揭而進、但無火炬、而舟人遙呼不已、乃出洞門。〔其北更有一巖、覆結奇〕雲、下插淵黛、土人橫杙架板如閣道。然第略爲施欄設几、即可以坐括水石、恐綴瓦備扁、便傷雅趣耳。徙倚久之、仍從石蹬透出巖後、遂凌絕頂。其上有佛廬官閣、石間鐫刻甚多、多宋・唐名跡、而急不暇讀、以舟人促不已也。

下舟溯江、漸折而東、七里至香爐山。山小若髻、獨峙於西岸、山、江中乃^{*2}石骨攢簇而成者。其上佳木扶搖、其下水竅透漏。最可異者、不在江之心、三面皆沙磧環之、均至山足則決而成潭、北西南俱若界溝、然沙遜於外、而水繞其內、其東則大江之奔流矣。蓋下流之沙不能從水而上、而上流之沙何以不逐流而下、豈日夜有排剔之者耶？亦理之不可解也下午過金牛灘、其上有金牛嶺、一峯尖峭、而分聳三峯、斜突而橫竄、江流直搗其脅。至是舟始轉而南、得風帆之力矣。是晚宿於廟下、舟行共五十里、陸路止二十里也。

先是、余聞永州南二十五里有澹巖之勝、欲一遊焉。不意舟行五十里而問之、猶在前也。計當明晨過其下、而舟人莽不肯待。余念陸近而水遠、不若聽其去、而從陸躡之、舟人乃首肯。

●校勘

* 1 此 黃琬は、「原作「北」、拋乾隆本改」と注するが、現行の上海新整理本は「此」に作る。

* 2 山、江中乃 朱惠榮は「山」は「出」の誤記ではないかとし、「江中より出づるは、乃ち（江から突き出している部分は）」と訳し、黃琬は「乃」と「江中」が錯簡で乙正すべきとし、「山の江中は（山の川の中の部分は）」と訳す。今、黃琬に従う。

■訳注の部

●訓訳

十四日

余早に晨餐を索め、仍りて浮橋を過ぎて西す。一長者を見る。余此の中の最勝を叩ふに、

曰く「江を遡して南に二里にして、江に瀕するの朝陽巖たり。江に隨ひて北し、轉じて山崗に入ること二里にして、芝山巖たり。得て三なるは無きなり」と。余之に従ひて、先づ北して芝山に赴く。

江の西岸に循ひて半里にして、劉侍御の山房に至る「諱は興秀、余が郡の司李となる者なり」。其の側より北して山に入る。一嶺を越え、西に亭有るを望む。之を捨てて上らず。徑道に由りて北して山崗を逾へ、其の上に登る。即ち山の西北を見る。湘水其の北に在りて稍々遠し。又た一小水の其の西より來りて、山の東南に逼近す。瀟水是其の東に在りて、遠近之に従ふ。瀟江の東岸に、又た塔の江に臨む有り。此の山と瀟を夾みて、永の水口となる者なり。蓋し此は即ち西山北走の脈にして、更に北して瀟湘合流の處に盡き、此に至る其の中に已に三起三伏す。當に即ち《志》に稱する所の萬石山なるべし。郡人記を作りて或ひは稱して陶家冲となし「土名なり」、或ひは稱して芝山となす「形に似せて名を似せるなり」。或ひは又た崖に鑿して亭を歴し、《序》に「此の山は即ち柳子厚の西山なり。後に芝を産するに因りての故に、名を易へて芝となす」とす。未だ必らずしも然らざるなり。

嶺を越えて北し、嶺の上より東に轉ずれば、前に樹色の掩映し、石崖の巒岈たるを見る。異境有るを知るなり。亟に崖の足に下り、仰ひて之を望めば、崖巔は即ち山巔にして、崖足は即ち山足の半ばなり。其の下に菴の之に倚る有り。路の其の北を繞りて上る有り。乃ち菴に入らずして先づ路を披く。遙に望む、巔崖の聳透すること固より奇にして、而して兩旁は亂石攢繞し、或ひは上に或ひは下に、或ひは起り或ひは伏し、蓮萼芝房の如く、中は空にして外は簇なり。地に隨ひて是なり。

小徑の其の間より上りて崖頂に至る。一石關を穿ちて入る。室の南向せる有るも、門閉じて入るを得ず。其の南を繞して西に至り、復た石峽を穿ちて入る。蓋し其の側に東西二門有りと云ふ。室は一楹に止まり、山頂衆石の間に在り。仍りて其の西峽に従ひて下りて崖足に至る。一路竹木扶疏し、玉蘭鋪雪し、地に滿ちて餘香猶ほ在り。崖の下の菴中に入るに、白衣大士の甚だ莊嚴なる有り。北に一小閣の憩ふべき有り。南に一淨侶の精廬を結びて之に依る有り。門は其の左に在り。初めは従りて知る無く、問ひて之を得るも、猶ほ従りて進む無し。僧忽として内より扉を啓きて揖して入らしめんとす、之に従ふ。小庭に側竇あり、穿臥隙而上、則ち崖石の穹然たるあり。亭の石端に綴る有り。四窗空明にして、花竹掩映し、其の幽奥を極む。僧の號は覺空、堅く留めて茗を淪る。余待つこと能わずして出づ。

仍りて舊路に従ひ、南して浮橋に至る。聞く、直西に四十里にして寺有り、石門山と曰ふ、最も勝なり、と。朝陽巖に登るを渴くするを以て、往くに及ばず。顧奴をして橋の東より瀟を遡り、舟の南に上るに放はしむ。余は橋の西よりして、仍りて愚溪橋を過ぎ、瀟の西崖を遡りて南に行く。一里にして、大道折れて西南す、道州道なり。岐徑によりて東南に一里にして、則ち一山怒して石を豎て、奔して江と鬬ふ。其の上を逾え、俯して東して石關に入る、其の内は飛石の空に浮き、下瀟水を瞰る。即ち朝陽巖なり。其の巖の後ろは通じ前は豁く、上は重崖覆ひ、下は絶壑に臨み、中は憩ふべく倚るべし。雲帆遠近に、其の前に縱送す。甫かに足を佇むを惜しむに、舟人已に舟を其の下に放ち、連聲して呼促す。余顧みず。崖に北に石蹬の直ちに縁江に下る有り。亟に之に従ふ。蹬の西は危崖に倚り、東は澄江に迫る。

盡くる處に忽として洞の岬然たる有り。高さ二丈、闊さも亦た之の如し。亦た東面は江に臨み、溪流中より玉を噴して出す。蓋し水洞なり。洞口より少しく入れれば即ち轉じて南す。平整軒潔にして、大江其の門に當る。泉流其の内を界し、亦た憩ふべく濯ふべし。乃と上の巖と高下奇を擅にし、水と石と共に韻する者なり。洞に入ること五六丈にして、即ち匯流洞を滿たす。洞亦た西に轉じて黒く、計るに掲げて進むべきも、但だ火炬無く、而も舟人遙かに呼して已まず。乃ち洞門を出づ。

其の北に更に一巖有り、覆ふに奇雲を結び、下は淵黛に挿す。土人杙を横たへ板を架し、閣道の如し。然して第だ略に欄を施し几を設くるをなさば、即ちもつて坐して水と石とを括るべし。恐るらくは瓦を綴りて扁を備ふれば、便ち雅趣を傷らんのみ。徙倚之を久しくし、仍りて石磴より巖の後ろに透出し、遂に絶頂を凌ぐ。其の上に佛廬官閣有り。石間に鐫刻甚だ多し、宋・唐の名跡多し。而して急にして讀むに暇あらず、舟人の促して已まざるを以てなり。

舟に下りて江を溯る。漸く折れて東す。七里にして香爐山に至る。山は小なること譬の若くにして、獨り西岸に峙す。山の江中は、石骨の攢簇して成る者なり。其の上は佳木扶搖し、其の下は水竅透漏す。最も異とすべき者は、江の心に在らずして、三面は皆に沙磧の之を環み、均しく山の足に至れば、則ち決して潭を成す。北西南は俱に界せる溝の若くなり。然して沙は外に遜れ、而して水其の内に繞り、其の東は則ち大江の奔流なり。蓋し下流の沙は水に従ひて上る能わずして、上流の沙は何を以て流れを逐ひて下らざる。豈に日夜、排剔する者有らんや。亦た理の解すべからざるものなり。

下午、金牛灘を過ぐ。其の上に金牛嶺有り、一峯尖峭として、分れて三峯を聳え、斜めに突して横に竄す。江流直ちに其の脅を搗く。是に至りて舟始めて轉じて南す。風帆の力を得。

是の晩、廟下に宿す。舟行は共に五十里にして、陸路は二十里に止まるなり。

是より先、余聞く、永州の南二十五里に澹巖の勝有り、と。一遊せんと欲す。意はずして舟行五十里にして之を問ふに、猶ほ前に在るなり。計るに、明晨に當りて其の下を過ぎんど。而るに舟人は莽にして待つを肯んぜず。余念ふ、陸は近くして水は遠し。其の去るを聽して、而して陸に従ひて之を躡ふにしかず、と。舟人乃ち首肯す。

●語注

○朝陽巖 「大明一統志」卷六五永州山川に「朝陽巖」在府城西、瀟江之澚。巖有洞、

○芝山巖 山峯の名であらう。後の「芝山」も同じだろう。

○劉侍御 劉興秀。字は振賢。「明人伝記資料索引」に記事がない。黄琬は、詳細な事績を載せる。それによれば、零陵廬陵の人で、天啓（五年、一六二五）の進士。巡撫淮揚御史などを歴任した。霞客が劉侍御と称するのはこれによるか。清軍が入関し、永州を包围するにおよび、内応を疑われて惨殺された。人は「孤忠」と称した、とある。

○司李 司理に同じ。地方官で獄訟を司る。

○萬石山 「大明一統志」卷六五永州山川に「萬石山」在府城北。多怪石、下瞰碧沼」とある。

○歷亭 歴に選ぶの意がある。黄琬は、土地を選んで亭を建てた、と訳す。

○嶺岫 山が高く鋭いさま、あるいはそびえ立つさま。

- 透 飛び出す、姿を現す。
- 攢繞 集まって取り囲む。
- 扶疏 木の枝葉が広がるさま。
- 玉蘭 ハモクレン。
- 鋪雪 雪のように敷き詰められているさま。玉蘭の花びらが地面を覆っているさまだろう。
- 白衣大士 観音菩薩。
- 放舟 船をならべてもやうこと。ここでは船が進むのに並行して、顧僕が河沿いを歩いて進む、と解した。
- 岬然 深いさま。
- 韻 響き合う。
- 淵黛 深碧の淵、と解した。
- 徙倚 さまよいいうろつきまわる。
- 山、江中乃 朱恵榮は「山」は「出」の誤記ではないかとし、「江中より出づるは、乃ち（江から突き出している部分は）」と訳し、黄琬は「乃」と「江中」が錯簡で乙正すべきとし、「山の江中は（山の川の中の部分は）」と訳す。今、黄琬に従う。
- 沙磧 砂や小石の多い川原。
- 排剔 排は、取り除く。剔は、えぐって取り除く、あるいは疎通させる。
- 永州南二十五里 澹巖の所在を示す情報であるが、あるいは直線距離（陸路）を言っているのかもしれない。このあたりは、川筋は「S字」を成しており、水路の行程は、直線距離よりかなり長くなる。
- 莽 粗雑、がさつ。お客の希望を聞き入れるという丁寧さがなくことか。

●口語訳

〔十四日〕

早朝に朝食を摂り、浮橋を通って西岸に渡る。ひとりの長者に会い、この地の最勝を問うと、こう言った「瀟江を遡及して南に二里のところに、江に面して朝陽巖がある。瀟江に沿って北上し、（西に）転じて山崗に入ること二里で、芝山巖がある。この二つが形勝で、他の三番目はない」と。私はこの話に従って、先ず北の芝山に赴くことにした。

瀟江の西岸に沿って半里進むと、劉侍御の山房に至る〔諱は興秀、私の故郷の郡（常州府）の司法官となった者である〕。その側から北へ山に入る。嶺を越えると、西に亭があるのが遠望できた。しかしそこは選択せず。小路を北に進み山崗を逾えて、山の上に登る。そこから山の西北を見る。湘水が北を流れているが、やや遠い。他にも又た一筋の小川が西から流れてきていて、この山の東南に迫っている。瀟江はこの山の東にあつて、ここからの距離は湘江と同じくらい。

瀟江の東岸には、江に臨んで塔が建てられている。この山とともに、瀟江を挟んでいて、永州の水口をなしている。思うに、これは西山から北走している地脈で、更に北へ進んで瀟湘二江が合流している場所で尽きている。ここに至る間に、三回起き上がり、三回地に潜っている。

この山は、「大明一統志」に言う万石山にあたるだろう。永州の人が「記」を作ってい

て、ある人は「陶家沖」と呼んでおり「地元での呼び名である」、ある人は芝山と呼んでいる「山の形に似せて名をつけたものである」。またある人は、崖に文字を彫りこみ、よい土地を選んで亭を建てている。その碑文の序文に、「この山は、柳宗元の『永州八記』にいう西山である。後に靈芝を産出することから名を芝山と変えたのだ」とある。実際にはこうではないだろう。

山嶺を越えて北に向かい、山嶺の上で東に転ずれば、目の前には、木々の緑が見え隠れし、石の崖が高くそびえ立っているのが見える。まことにここは神異な佳境であることがわかる。急いで崖の根本のあたりに下り、仰ぎ見れば、崖の巔が山の巔になっており、今いる崖の根本のあたりは、山の中腹になっていた。下の方に、崖によりかかるようにして菴がある。その菴の北をまわって登る路がある。そこで菴には入らずに、その路をたどる。すると遙かに見えてきた景観は、崖の巔が聳え立って姿を現すさまはもとより奇景であり、その旁を不揃いな石が集って取り囲み、あるものは巔よりも上まで伸び、あるものは頂に及ばず、あるものは起き上がるようで、あるものはひれ伏すようで、蓮の萼や芝の花弁に似て、内部が中空で外側に群がり集まっている。いたるところがこうした景観である。

そうした景観の中を通って、崖の頂に至る小路がある。（その小路を進み）石の関所のような穴をくぐって通る。（すると）南向きの小屋があるが、門が閉ざされていて入ることができなかった。（そこで）その小屋の南側を回って西に向かうと、再び石に夾まれたところを通り抜ける。その側に東西の二つの門があると聞いた。しかしその小屋は一間しかなく、山頂のたくさんの石の間にあった。そこでその西側の谷に沿って下り、崖の根元のあたりに至る。

この一筋の路には竹木が枝葉を茂らせ、玉蘭花の花びらが雪のように地面に敷き詰められている。ほのかな残り香がまだ漂っている。

（さきほどパスした）崖の下の菴に入ってみると、とても荘厳な観音菩薩の像があった。その北に休憩できる小閣があった。南には一人の僧侶が精舎を結んでいた。門は精舎の左にあった。初めはそれが分からず、声をかけると教えてくれたが、どうやらいいのか分からない。すると僧侶が忽然と内側から扉を開き、お辞儀をしながら招き入れるので、それに応じた。小さな庭がありその側の穴のあいた巖があり、その隙間を屈みながらくぐって上ると、聳える崖石があった。巖の端に亭子が営まれている。四面の窓は明るく明らかで、花や竹が見え隠れし、幽奥の極みであった。僧侶の号は覺空といい、私を堅く留めてお茶をいれようとしてくれる。しかし私はできあがるのを待てないので辞退して退出した。

そこで元の道に沿って南に進み、浮橋まで戻る。ここで「直西四十里のところに石門山という寺院があつて、最高の景勝である」と聞いた。（しかし、残念ながら）朝陽巖に登ることを渴望していたので、石門山に行くのはあきらめた。

顧奴には浮橋の東から瀟江を遡り、南に遡上する船に並行して行くよう指示した。私はといえば、橋の西から発し、愚溪橋を渡り、瀟江の西岸を遡って南へ向かうこととした。

一里で、大道は西南に曲がった、これは道州へ向かう道である。（私はそれによらず）分かれ道を選び、東南に一里進むと山が一座盛り上がり、石を建てたようにしていて、奔走して瀟江と闘っているかのようだ。その上を越えて、身を伏せて東へ石の門に入る。その中は、飛びだすような石が中空に浮いており、瀟水を見下ろしている。これこそ朝陽巖

である。

その巖は、後ろから貫通した穴が前面では広く開けており、上は重なる崖が覆いかぶさり、下は絶壁に臨んでいる。その間では、ゆっくり休むことも寄りかかることもできる。巖の上からは、遠景や近景に、雲の上にただようような白帆が奔走しているのが眺められる。わずかでもここに足を留めて眺めていたかったのだが、船頭が巖の下まで船を運び、何度か呼びかけて乗船を促す。しかし私はそれを無視することにする。崖の北側に瀟江の畔まで直接くだることのできる石段があった。急いでこの石段を下る。石段に西側はそりたつ崖に張り付き、東側は清澄な江水が迫っている。

その石段が尽きたところに、忽然と深い洞穴が口を開けていた。洞穴の高さは二丈、横幅も同じくらいである。東に面して瀟江に臨むが、洞口から溪流が珠玉を吹き出しながら噴出している。水洞である。洞口から少しばかり入るとすぐにまがって南に進むことになる。中は平らで整っており、清潔である。瀟江という大江が洞門の前に流れる。洞穴の内部は泉水で区切られており、ここも（巖と同じく）ゆっくりと休むことも（心を）洗うこともできる。つまり上の巖とペアになって、ひとつは高いところで、もうひとつは低いところで、奇勝を思いのままにしており、水と石とで共に自然の美しさについて響き合っているものである。洞に五六丈進むと、集まってきた流水が洞全体に広がっていた。洞はまた西に曲がって伸びており、衣を掲げてさらに進むことはできそうだったが、残念なことに火炬は無く、しかも船頭が遙かから私を呼んで止まない。しかたなく洞門から出た。

（洞を出ると）北に更にひとつの巖があった。表面を奇妙な雲形のような模様が被っており、巖の下部は、深碧の淵の中に沈んでいる。土地の人が杭を横に並べ、そこに板を渡して、棧道のようなものを作っている。そこで簡略に欄干をつけて、机などを備えたならば、安座して水と石の両方を一緒に楽しむことができるだろう。しかし瓦を綴りて屋根を備えたりしたならば、雅趣を損なうものとなるだろう。しばらくさまようつきまわり、ついに石段を通って巖の後面に出て、巖の頂上に登る。そこには僧侶の廬と官が設けて楼閣があった。石の壁にはたくさん文字が彫りこまれており、宋や唐の名跡が多くあった。しかし、急いでいるのでゆっくり読んでいる暇はなかった。船頭がせかしてやまないからである。

舟に乗り瀟江を溯る。だんだんと曲がり東へ向きを変える。七里で香爐山に至る。山は髻のように小さく、瀟江の西岸にぽつんと立っている。山の江中の部分は、削られて骨のような石が集まってできている。山の上には佳木が風に吹かれて揺れ動き、山の下部は水洞が通貫している。しかし最も異とすべきは、この山の三方のありようである。山は川を中心にはなく、三方面は砂や小石の川原が取り囲んでいるが、どちらも山の麓にいたると、川原が切れていて水たまりを形成している。北西南の三方は、いずれも溝で区切ったようになっている。そして砂は外に排斥されて、水が溝に流れ込んで山を囲っており、東側は大江の奔流が流れている。思うに、下流の沙は流れと共になのであって、上流へ上がることはできないはずだし、上流の沙はどうして流れを追って下流へ下らないのだろうか。毎日や砂を取り除いて疎通させる者が入るとでも言うのか。まったく理にかなわないことである。

午後、金牛灘を通過する。その畔に金牛嶺がある。峯がひとつ尖って険しく、先が三つの峯に分かれて聳え、斜めに突出しては、横に飛び出している。瀟江の流れが嶺の脇腹に

突き当たっている。ここに至って、船は南に進路を変えた。追い風を得て帆が膨らんでいく。

この晩は、廟下に宿る。この日の船での行程は五十里で、陸路での行程は二十里に止まる。

以前私は、「永州の南二十五里に澹巖という景勝がある」と聞いていた。そこで澹巖への一遊を考えていた。気づかないうちに舟行で五十里行ってしまったので、どうかと問うてみたところ、まだ前途にあるとのことだった。行程をはかると、明日の朝にその下を通過するらしいことが分かった。(そこで、澹巖のところでおろしてもらい、船には待っていてもらおうと考えたが)、船頭はがさつもので、私を待つことを承知しない。そこで考えた、(川は幾度も曲がりくねっているため)、水路は距離があっても、陸路の方が近道になるのではないか。船が出発するのを認めて、自分は澹巖を探索した後に、陸路で船を追いかければ良いのではないかと。その旨を持ちかけると、船頭は受け入れた。

「三月十五日」

《概要》巖背で船を下り、双牌での再会を期して、自らは澹巖探訪へ。澹巖の巖、そこからの遠景などを楽しみ、さらに和尚嶺、出水崖などを探訪。ようやく瀟江へ出て、双牌へ至ると船もまもなく到着。船に乗り、南へ。横口で停泊。

■本文の部

十五日

五更聞雨聲泠泠、達旦雷雨大作。不爲阻、亟炊飯。五里至巖背、力疾登涯、與舟人期會於雙牌。雙牌者、永州南五十里之鋪也。永州南二十五里爲巖背、陸路至此與江會。陸路從此南入山、又二十五里而至雙牌；水路從此東迂溯江、又六十里而至雙牌。度舟行竟日、止可及此、余不難以病體追躡也。巖背東北臨江、從其南二里西向入山、山石忽怒湧作攫人狀。已而望見兩峯前突、中有雲廬高敞、而西峯聳石尤異、知勝在是矣。及登之、而官舍半頽。先是望見西峯之陽、洞門高張、至是路從其側而出、其上更見石崖攢舞、環玦東向、其下則中空成巖、容數百人、下平上穹、明奧幽爽、無逼仄昏暗之狀病。其北洞底亦有垂石環轉、覆楞分内外者、巨石磊砢界道、石上多宋・元人題鏤。黃山谷最愛此巖、謂爲此中第一、非以其幽而不悶、爽而不露耶？巖東穿腋竅而上、有門上透叢石之間、東瞰官舍後廻谷、頓若仙凡分界。巖西南又闢一門、逾門而出其右、石壁穹然、有僧寮倚之、西眺山下平疇、另成一境、桑麻其中。有進賢江發源自西南龍洞、(洞去永城西南七十里。江)東來直逼山麓、而北入於瀟。進賢江側又有水洞、去此二里、秉炬可深入、昔人謂此洞水陸濟勝、然不在一處也。按澹巖之名、昔爲澹姓者所居。而舊經又云、有正實者、秦時人、遁世於此、始皇三召不赴、復屍解焉。則又何以不名周也。從僧寮循巖南東行、過前所望洞門高張處、其門雖峻、而中夾而不廣、其內亦不能上通後巖也。

仍冒雨東出臨江、望瀟江迢迢在數里外、自東而來。蓋緣澹山之南、即多崇山排互、有支分東走者、故江道東曲而避之。乃舍江南行、西遵西嶺、七里至木排鋪、市酒於肆、而雨漸停。又南逾一小嶺、三里爲陽江。其江不能勝舟、西南自大葉江・小葉江來、至此二十餘

里」東注於瀟。其北則所謂西嶺者橫亙於右、其南則曹祖山・張家冲諸峯駢立於前。又南七里、直抵張家冲之東麓、是爲陳皮鋪。又南三里、逾一小嶺、望西山層墜而下、時現石骨、逗奇標異；已而一區湊靈、萬竅逆幻。亟西披之、則石片層層、盡若雞距龍爪、下蹲於地、又如絲瓜之囊、筋縷外絡、而中悉透空；但上爲蔓草所縛、無可攀躋、下爲棘箐所塞、無從披入。乃南隨之、見旁有隙土新薶地者、輒爲捫入、然每至純石、輒復不薶。路旁一人、見余披陟久、荷笠倚鋤而坐待於下、余因下問其名、曰：「是爲和尚嶺、皆石山也。其西大山、是爲七十二雷。」因指余前有菴在路隅、其石更勝。從之、則大道直出石壁下、其石屏插而起、上多透明之竇、飛舞之形；其下則清泉一泓、透雲根而出。有菴在其南、時僧問其名、曰：「出水崖。」問他勝、曰：「更無矣。」然仰見崖後石勢駢叢、崖側有路若絲、皆其薶地境也。賈勇從之、〔其上石皆如臥龍翥鳳、出水青蓮、萼叢瓣裂。轉至出水崖後、覺茹吐一區、包裹叢沓、而窈窕無竟。蓋其處西互七十二雷大山、叢嶺南列、惟東北下臨官道、又出水崖障其東、北復屏和尚嶺、四面外同錯綺、其中怪石層明、彩豔奪眇。予乃透數峽進、東北屏崖之巔、有石高巖、若天門上開、不可慰即。巖石西南、即出水崖內壑、一潭澄石隙中、三面削壁下嵌、不見其底、若爬梳沙蔓、令石與水接、武陵漁當爲移棹。予歷選山棲佳勝、此爲第一、而九疑尤溪村口稍次云。〕

〔搜剔久之〕乃下。由菴側南行二里、有溪自西南山凹來、大與陽溪似。過溪一里、東南轉出山嘴、復與瀟江遇。於是西南溯江三里、則雙牌在焉。適舟至、下舟、已下春矣。雙牌聚落亦不甚大、其西南豁然、若可遠達、而舟反向南山瀧中入。蓋瀟水南自青口與沅水合、即入山峽中、是曰瀧口。北行七十里、皆連山駢峽、虧蔽天日、〔且水傾瀉直中下、〕一所谓云「瀧」也。瀧中有麻潭驛、〔屬零陵。〕驛南四十里屬道〔州〕、驛北三十里屬零陵。按其地即丹霞翁宅也、《志》云：「在府南百里零陵瀧下、唐永泰中有瀧水令唐節、去官即家於此瀧、自稱爲丹霞翁。元結自道州過之、爲作宅刻銘。然則此瀧北屬零陵、故謂之零陵瀧。而所谓瀧水縣者、其即此非耶？又按《志》：「永州南六十里有雷石鎮、當瀧水口、唐置。則唐時瀧水之爲縣、非此而誰耶？時風色甚利、薄暮、乘風驅舟上灘、卷浪如雷。五里入瀧、又五里泊於橫口、江之東岸也、官道在西岸、爲雷石鎮小墅耳。」

〔自永州至雙牌、陸五十里、水倍之。雙牌至道州、水陸俱由瀧中行、無他道。故瀧中七十里、止有順逆分、無水陸異。出瀧至道州、又陸徑水曲矣。〕

■ 訳注の部

● 訓訳

十五日

五更に雨聲の冷冷たるを聞く。旦に達するに雷雨大いに作るも、阻むとなさず。亟に飯を炊く。

五里にして巖背に至る。力疾して崖に登る。舟人と雙牌に會するを期す。

雙牌は、永州の南五十里の鋪なり。永州の南二十五里は巖背たり。陸路は此に至りて江と會す。陸路は此より南して山に入り、又た二十五里にして雙牌に至る。水路は此より東の迂して江を溯り、又た六十里にして雙牌に至る。舟行を度るに日を竟ふれば、止だ此に及ぶべきのみ。余、病體を以て追躡するを難しとせざらん。

巖背は東北に江に臨む。そこより南に二里にして西に向ひて山に入る。山石忽として怒湧し、人を攪ふの状を作す。已にして兩峯の前に突し、中に雲廬高敞有りて、而して西の

峯は聳石尤も異なるを望見す。勝の是に在るを知るなり。

之に登るに及びて、官舎半頽せり。是より先、西峯の陽を望見するに、洞門は高張す。是に至れば、路の其の側より出づ。其の上には更に石崖の攢舞し、環玦の東向するを見る。其の下は則ち中空にして巖を成し、數百人を容る。下は平らに上は穹にして、明奥幽爽、逼仄昏暗の状病無し。其の北の洞底にも亦た垂石の環轉して、覆楞の内外を分かつ者有り。巨石磊砢するに道を界す。石上に宋・元人の題鐫多し。黃山谷最も此の巖を愛し、此の中の第一たり、と謂ふ。其の幽にして悶せず、爽にして露せざるを以てなるか。巖の東を腋竅を穿ちて上るに、門の上つかた叢石の間を透せる有り。東のかた官舎の後ろの廻れる谷を瞰れば、頓に仙凡の分界の若し。巖の西南に又た一門を闢く。門を逾えて其の右に出づれば、石壁穹然たりて、僧寮の之に倚る有り。西のかた山下の平疇を眺むれば、另に一境を成し、桑麻其の中にあり。

進賢江有り。源を發すること西南の龍洞よりす。洞は永城を去ること西南に七十里なり。江は東に來りて直に山麓に逼り、而して北して瀟に入る。

進賢江の側に又た水洞有り。此を去ること二里にして、炬を秉れば深く入るべし。昔人の謂ふ「此の洞は水陸勝を濟る。然れども一處に在らざるなり」と。按ずるに、澹巖の名は、昔、澹姓の者の居る所とたり。而して舊經に又た云ふ、正實なる者有り、秦の時の人なり。世を此に通る。始皇三たび召すも赴かず、復た屍解せり」と。則ち又た何を以て周と名せざるや。

僧寮より巖の南に循ひて東に行き、前に望む所の洞門の高く張れる處を過ぐ。其の門は峻なりと雖も、中は夾くして廣からず、其の内も亦た後巖に上通する能わざるなり。

仍りて雨を冒して東に出でて江に臨む。瀟江を望むに迢迢として數里の外に在りて、東よりして來る。蓋し澹山の南なるによりて、即ち崇山の排互せるもの多し。支の分れて東に走る者有り、故に江道は東に曲りて之を避く。乃ち江を捨てて南に行く。西に西嶺に遵ふ。七里にして木排鋪に至る。酒を肆に市ふ。而して雨漸く停む。又た南に一小嶺を逾ゆ。三里にして陽江たり。其の江は舟に勝ふること能わず。西南のかた大葉江・小葉江より來り、此に至るに二十餘里、東して瀟に注ぐ。其の北は則ち所謂「西嶺」なる者、右に横互す。其の南は則ち曹祖山・張家沖の諸峯前に駢立す。又た南に七里にして、直ちに張家沖の東麓に抵る。是れ陳皮鋪たり。又た南に三里にして、一小嶺を逾ゆ。西山の層墜ちて下り、時に石骨を現すを望む。奇を逗め異を標はす。已にして一區に靈を湊め、萬竅幻を逆ふ。亟に西して之を披けば、則ち石片層層として、盡く雞距龍爪の下りて地に蹲るが若し。又た絲瓜の囊の如く、筋縷外絡して、而して中は悉く透空なるあり。但だ上は蔓草の縛る所となりて、攀躋すべき無し。下は棘箐の塞ぐ所となりて、よりて披き入る無し。

乃ち南して之に隨ふ。旁に隙土の新たに地を薙ぐる者有り、輒ち捫入るをなさんとす。然れども毎に純石に至り、輒ち復た薙がず。路旁に一人あり、余の披陟すること久しきを見、笠を荷し鋤に倚して坐して下を待つ。余因りて下りて其の名を問ふに、曰く「是れ和尚嶺たり。皆石山なり。其の西の大山は、是れ七十二雷たり」と。因りて余が前に菴の路隅に在る有るを指さし、其の石更に勝なり、と。之に従へば、則ち大道直ちに石壁の下に出づ。其の石は屏のごとく插して起き、上に透明の竇、飛舞の形多し。其の下は則ち清泉一泓、雲根を透して出づ。菴の其の南に在る有り。時に僧あり、其の名を問へば、曰く「出水崖なり」と。他の勝を問ふに、曰く「更に無し」と。然れども崖の後ろを仰ぎ見れば、

石勢は駢叢として、崖側に路の絲の若き有り、皆な其れ薶地の境なり。勇を買して之に従ふ。其の上の石は皆臥龍翥鳳、水を出でたる青蓮、萼の叢り瓣の裂くが如し。轉じて出水崖の後ろに至るに、茹吐の一區、包裹叢沓されて、窈窕の竟る無きを覺る。

蓋し其の處は西は七十二雷大山に互り、叢嶺南に列し、惟だ東北は下りて官道に臨み、又た出水崖其の東を障し、北は復た和尚嶺に屏せらる。四面の外は同に綺を錯へ、其の中の怪石層して明にして、彩豔にして眺を奪ふ。予は乃ち數峽を透して進む。東北の屏崖の巔に、石の高砦たること、天門の上に開くが如き有るも、慰即すべからず。砦石の西南は、即ち出水崖の内壑にして、一潭の澄なる石隙の中にあり。三面は削壁下嵌し、其の底を見ず。沙蔓を爬梳するが若し。石と水とをして接せしめ、武陵漁當に棹を移すをなすべし。予山棲佳勝を歴選するに、此れを第一と為す。而して九疑の尤溪の村口稍々次ぐと云ふ。

搜剔すること之を久しくして、乃ち下る。

菴の側より南に行くこと二里にして、溪の西南の山凹より來る有り。大いに陽溪と似たり。溪を過ぎ一里にして、東南に轉じて山嘴を出で、復た瀟江と遇ふ。

是において西南に江を溯ること三里にして、則ち雙牌焉に在り。適々舟至り、舟に下る。已に下春なり。

雙牌の聚落も亦た甚しくは大ならず。其の西南は豁然として、遠達すべきが若し。而して舟は反つて南山の瀧中に向かひて入る。

蓋し瀟水是南の方、青口と沅水との合するよりして、即ち山峽の中に入る。是を瀧口と曰ふ。北に行くこと七十里、皆連山駢峽、天日を虧蔽され、且つ水は傾瀉して直ちに中下す。一に云ふ所の「瀧」なり。瀧の中に麻潭驛有り「零陵に屬す」。驛の南四十里は道州に屬し、驛の北三十里は零陵に屬す。按ずるに、其の地は即ち丹霞翁の宅なり。《志》に云ふ「府の南百里零陵瀧の下に在り」「唐の永泰中、瀧水令唐節有り、官を去り家を此の瀧に就け、自ら稱して丹霞翁となす。元結道州より之を過ぎり、爲めに宅刻銘を作る」と。然れば則ち此の瀧北は零陵に屬す、故に之を謂ひて零陵瀧と。而して所謂る瀧水縣なる者、其れ即ち此か非か？又た《志》を按ずるに「永州の南六十里に雷石鎮有り、瀧水口に當る、唐置く」と。則ち唐の時、瀧水の縣たるは、此に非ざるか、誰ぞや。

時に風色甚だ利なり。薄暮にして、風に乗りて舟を驅り灘を上る。卷浪雷の如し。五里にして瀧に入る。又た五里にして横口に泊す。江の東岸なり。官道西岸に在り、雷石鎮の小墅のみ。

永州より雙牌に至るは、陸は五十里にして、水は之に倍す。雙牌より道州に至るは、水陸俱に瀧中より行き、他の道無し。故に瀧中の七十里は、止だ順逆の分有るのみにして、水陸の異なること無し。瀧を出でて道州に至るは、又た陸は徑にして水は曲なり。

●語注

○冷泠 水や風の涼しげなさま。

○巖背 上海新整理本は、傍線を引き固有名詞と見るが、澹巖の背の部分という一般名詞だろう。あるいは、「巖北」でもよい。その場合は、「澹巖の北」。現代地図等に見えないが、永州府治から陸路を南下して、瀟江とであうところについて「桂林」図では「舊積河」、大地図らでは「富家橋鎮」の名が見える。

- 雙牌 今の双牌県治。
- 鋪 駅、宿場。
- 雲廬 熟語は無い。廬は小屋。雲が意味するものは、「雲のように高く大きい」か「雲霧に覆われているようにぼんやりとしている」か。後ろに「高敞」の形容がついているので、後者で訳した。
- 高敞 高く広々としたさま。
- 攢舞 攢は、集まる。群舞くらいの意味か。
- 環玦 環は、環状の帯び玉で、玦は、その一部を欠いた壁。いずれも円盤状でまんなか
が空いているもの。洞口の表現であろう。
- 明奥幽爽 明と爽は、明るい、奥と幽は、深遠で静か。
- 逼仄 狭い。
- 昏暗 暗い。
- 状病 健康でない（よくない）状況。
- 覆楞 楞は、線状の突起物。覆楞で、扉の上から下に垂れ下がっている簾のようなもの
ではないか。
- 磊砢 たくさん積み重なるさま。
- 界道 一筋の道を作る。
- 黄山谷 黄庭堅（一〇六五―一一〇五）、江西省洪州分寧の人。山谷は、号。進士に挙
げられ哲宗のとき「神宗実録」を編纂した。詩に長け、「蘇（軾）黄」と併称された。「宋
史」巻四四四本伝。「大明一統志」六五永州山川に「澹巖」があり、黄庭堅の澹巖を詠
んだ七絶を収録する。
- 進賢江 「桂林」図や現代地図では賢水とある。
- 進賢江側又有水洞 この洞には行っていないようである。
- 濟勝 「濟勝之具」とは、山川名勝を歩き回る道具で、健脚を言う。
- 按澹巖之名復屍解焉 この一文「大明一統志」巻六五永州山川「澹巖」では「昔
有澹姓者居其下、故名。而舊經又云、有周正實者、秦時人、遁世於此。成敗之數、皆先知
之。始皇三召不起。後尸解焉」とある。
- 有正實者 「大明一統志」では「有周正實者」と、姓を記すが、霞客は省いている。
- 迢 遙か遠いさま。
- 排互 排は並ぶ、互は、横に貫くだが、横に連なっていることだろう。
- 所謂西嶺 出典不詳。
- 張家冲 冲は、「山がちの里の平地」を現す語で、衡陽に「桃花冲」などがあつた。こ
こでは山を意味しているように思える。「○家冲」の語として、三月十四日条に、芝山の
異称として陶家冲が見られる。また「大地図」に村落の名前として「張家冲」がある。冲
に位置する村落を「○冲」と呼び、そこにある山をも「○冲」と呼んでいるのであろうか。
- 筋縷 筋絲（植物の葉脈）に同じか。
- 捫入 捫は、持つ。草や竹を手にとって引き抜こうとしているのか。
- 純石 土などがまじらない石。
- 泓 清らかで澄み渡っているさま。
- 雲根 岩山のこと。雲は岩から湧き出すと考えられたことによる。

○翥 羽を広げる。

○茹吐一區 茹は、食べる。茹吐で、食べたり息を吐いたりするエリア。つまり自分の周囲少しばかりの場所、ということか。

○包裹 つつむ。客が包み込まれたような感覚にあることを言うか。

○叢沓 沓は、幾重にも重なるさま。幾重にも重なるものに囲まれているような感覚にあることを言うか。

○碧 水辺の大きな石。朱恵栄は、拱の音通と見る。拱は、隆起する。

○慰即 不詳。心をなぐさめて、あるべきところにつける、くらいか。

○三面 二面か。

○下嵌 へこみ、落ちこむ。

○爬梳 手や櫛で髪を梳かすことか。転じてきれいに整えるくらいか。

○搜剔 探し尋ねる。

○山凹 山の窪み。

○陽溪 唐突に出てきている。不詳。

○下春 落日のとき。

○麻潭驛 大地図、小地図2に、麻灘がある。

○《志》云 「大明一統志」卷六五永州古蹟に「丹崖翁宅」在府城南一百里零陵瀧下。

○按《志》 「大明一統志」卷六五永州関梁に「雷石鎮」在府城南六十里、當瀧水口。唐置」とある。

○風色 風の向きや勢い。

○墅 田舎の家屋。黄琬が村落と解したので従う。

●口語訳

〔十五日〕

午前四時頃に、涼しげな雨音が始めた。夜明けに達するころには、大いなる雷雨となった。しかし、そうした天候に阻まれる私ではない。速やかに食事の支度をする。

（食事を終えると、船は出発した。）五里で巖背に至る。がんばって崖岸に上登する。船頭と双牌で合流する約束をする。

双牌は、永州府治の南五十里にある宿場まちである。永州府治の南二十五里が巖背である。永州府治からの陸路は、ここで瀟江と出会う。陸路では、ここから南に進んで山に入り、さらに二十五里で双牌に至る。水路では、ここから東へ迂回して瀟江を溯り、六十里で双牌に至る。舟行の時間を憶測するに丸一日で、ようやく双牌に至る事ができる程度であろう。私であれば、病気を抱えていても追いつくのは難しくはない。

巖背は東北側で瀟江に臨んでいる。ここから南へ二里進み、西に向きを変えて山に入る。すると巖山が忽然として聳え立ち、人をかつさうかのような姿をなしている。やがて、二つの峯が前に突き出ている、その中間には、雲霧をまとった小舎が高い所に位置している。そして西の峯は聳え立つ石がとても奇異であるのが、望見された。こここそが奇勝であることが分かった。

巖山を登ってみると、官舎は半ば壊れていた。先に、西峯の南を望見したときは、洞門が高いところで口を開いているようだった。近づいて見ると、洞の側から路が出ていた。

(そこでその道を伝って洞口まで登る。) 洞口の上には更に石の崖が群舞しているように躍動的に広がっており、丸い洞口は東を向いているのが見えた。洞を見下ろすと中は空洞で巖洞を形成しており、数百人を容れられるぐらいの広さがある。下面は平らで、上面はアーチ型である。明るく、かつ深遠幽遠で、狭いとか暗いとかいったマイナスの感じはなかった。洞底の北側には鍾乳石がぐるりと取り巻いて列んでいて、簾のように洞の内外を区切っているものがある。巨大な石がたくさん積み重なる中に一筋の道がある。その石の上には、宋・元人の題辞が数多く鏤されている。黄山谷が最もこの巖を愛好し、此の中の第一」と言っている。この幽深であるが閉鎖的でなく、明るいが露出的ではないことを評価したのだろうか。巖の東側を、脇のところの穴を通って上ると、上の方で、叢石の間をくぐるような門があった。そこから東の方の官舎の後ろに廻る谷を見下ろすと、ここが仙界と世俗世界とを区切る境界になっていることが分かった。巖の西南部に、また別の洞口が開いている。門をくぐって右に出ると、アーチ型に伸びる石の崖があり、僧寮が寄りかかるように立っていた。西の方の山下の平田を眺めれば、そこは一つの別世界を成しており、中には桑や麻が生えていた。

進賢江という川がある。源は西南の龍洞に発す。龍洞は永州府城を去ること西南に七十里である。進賢江は東に流れてきて、まっすぐ澹巖の麓に迫り、北に向きを変えて瀟江に入る。

進賢江の側に水洞がある(という)。ここ澹巖から二里の距離にあつて、松明をかかげていけば、深い所まで入ることができる。昔の人のことばに「この地の洞穴は水洞と陸洞と渡りあるくことができる名勝がある。けれども一箇所にあるわけではない」と。(「大明一統志」を)調べてみると「澹巖という名は、昔、澹という姓の人が住まいといたことになむ。しかし、古い資料では、秦の時代に(周)正実という人がいて、この澹巖の地に隠遁した。始皇帝が三回も招こうとしたが、遂に応ぜず、最後は尸解仙となって昇仙した、とある」ということだった。もし、後者であるならば、なぜ周巖という名にしなかったのだろうか。

僧寮から澹巖の南がわに沿って東に進み、先に遠望した高く張っている門のところを通る。この門は険峻だが、中は狭くて広くなく、門の内側には、後ろの巖山に上る道はなかった。

そこで雨をもとめせず東に出て瀟江に臨む。瀟江を望むに遙か遠くの数里離れたところにあり、東から流れてきている。ここは澹山の南にあたり、高い山が横に連なっているものが多い。(その中から)ひとつの支脈が分れて東に走っているものがある。そこで瀟江は、東に曲って、この支脈を避けているのである。そこで瀟江から離れて南へ進む。西の西嶺に沿って行く。七里で木排鋪に至る。酒を店で買った。雨はようやくやんだ。さらに又た南へ小さな山嶺をひとつ越える。三里で陽江である。この川は浅いため、船を浮かべることができない。西南の方の大葉江と小葉江から分かれてくるが、ここまで二十里あまりで、東に向かって瀟江に注ぐ。陽江の北には所謂「西嶺」があつて、右へ横たわっている。陽江の南には曹祖山と張家冲といった諸峯がその前に並び立っている。

さらに又た南に七里進むと、まっすぐに張家冲の東麓に至る。ここが陳皮鋪である。

さらに又た南に三里進む、小さな山嶺をひとつ越える。西の方を望むと、巖がだんだんと層を重ねており、ところどころに白い石が露出している山が見える。まことに奇勝をと

どめ、神妙な姿を現している。やがて、靈妙な景色を一箇所に集め、たくさんの穴が変幻さを迎えているかのようであった。そこで速やかに西に向かって見てみると、石片が層層として重なり、雞の蹴爪や龍の爪が地面に下って蟠るようなものであったり、絲瓜の囊のようであったり、外側を葉脈がめぐっており中は中空であるものなど、すべてが珍しい形態の石である。しかし、上の方は蔓に覆われており、よじ登るすべはない。下の方は棘や小さい竹に塞がれた藪になっており、分け入って山に近づく手立てがない。

そこでこの山に沿って南に進む。すると道の旁に草棘を取り除いたばかりの、隙間のような場所があるのが見えた。そこでそのあたりの草竹を手で引き抜き、藪に分け入ろうとした。しかし、その都度、固い石に阻まれ、どうしても引き抜くことができない。路旁に一人の人がいて、私は長いこと道を開いて進もうと苦戦しているのを見ていて、笠を荷ない、鋤に寄りかかって、下の方で待っている。そこで私も下に降りて、この山の名を問うたところ、次のように言う「和尚嶺である。全山石山である。西にある大山は、七十二雷である」と。さらに私の前方の路傍に菴があるのを指さし、その石はとてもよいですよ、という。そこでその言に従って前へ進むと、大道が真っ直ぐ石壁の下に至っていると出た。その石は屏風のように、地面から生えて立ち上がっており、上の方は透明の穴があり、飛び舞うかのような形をしているものが多くあった。石の下部は清泉が、岩山を透けて出てきている。菴はその南にあった。僧侶がいたので、この石の名前を問うと、「出水崖である」と言う。他の景勝地について聞いてみるが、「他にはありません」と言う。しかし、石崖の後ろを仰ぎ見ると、石の勢いがならび群がっており、崖の側には糸のような細い道があるのが見える。そこはすべて草竹が除去され、通ることができるようになっている。そこで勇を賈してその道を選ぶ。

その上の石は、臥して蟠る龍のようなもの、羽を広げた鳳凰のようなもの、水面に顔を出した青い蓮のようなもの、群がり生える萼のようなもの、激しく開いた花卉のようなものなど、すべてが珍奇な形をしている。

そして転じて出水崖の後ろに至ると、息がかかるくらい範囲で、つつみこまれ、重なり囲まれているような心地で、美しさが終わることがないような感覚に陥った。

思うに、この場所は西は七十二雷大山に連なるが、群がる嶺々が南側に並び、ただ東北方面だけは下って官道に臨んでいるが、出水崖が東側を塞いでおり、北は復た和尚嶺に屏風のように遮蔽されている。四周は彩絹が混じり合うような鮮やかな花や木々があふれ、その内側は怪石が層をなして明るく輝き、豔やかで美しく目を奪わんばかり。私はいくつもの山峡を通り過ぎながら進む。東北の屏風のような崖の巔に、高く隆起した石があり、天門が空に向かって開いているかのようだ。（しかし、高いところにあるため、近づいて見ることができず）心をなぐさめておちつかせることができない。

隆起している石の西南側が、出水崖の内側の谷で、一筋の澄んだ水が石の間を流れている。潭の三面は壁が削られて深く落ちこみ、潭の底は見えない。沙や蔓をくしけずるように整えているようだ。石と水とで作る景観はすばらしく、武陵の漁師に小舟をここに移させたいほどだ。私は、山での棲まいや佳き景勝を数多く見てきたが、ここが第一であろう。そして九疑山の尤溪の村口あたりがやややこれに次ぐと言えようか。

形勝をしばらく探し求めて歩き回り、やがて山を下った。

菴の側から南に二里行くと、西南の山の窪みから溪流が流れてきている。陽溪ととても

似ている。溪を渡って一里で、道は東南に転じ山の口を出で、再び瀟江と出会う。

ここから西南方向に瀟江を三里溯ると、双牌であった。ちょうど我々の舟が来た。そこで舟に乗る。

時にすでに日が落ちていた。

双牌の聚落も、それほど大きくはない。西南方向は開けていて、遠くまで見通せるようだ。しかし、舟は反って南山の激流の中に入っていく。

瀟水は、南の方の、青口と沱水とが合するあたりから山峽の中に入る。そこを瀧口と言う。北に流れること七十里、その間ずっと連なる山並みが両側から溪谷をなし、太陽の日差しも覆われ、水は急流をなして下る。いわゆる「瀧」である。瀧の途中に麻潭駅がある。「零陵県に属す」。駅の南四十里は道州に属し、駅の北三十里は零陵県に属す。考えるに、この地はとりもおさず丹霞翁の宅である。「大明一統志」に「永州府城の南百里、零陵瀧の下にある。唐の永泰年間（代宗、七六五〜七六六）、瀧水県の県令で唐節という者がいた。官をやめ、家をこの瀧のところに営み、自ら丹霞翁と号した。元結が道州から来てここを尋ねたときに、彼のことを記念して宅刻銘を作った」とある。そうであれば、この瀧の北は零陵県に属していたので、これは零陵瀧と呼ばれていたのであろう。ところが「大明一統志」に言う「瀧水県」というものは、このことであらうか、いや別の場所であらうか。また「大明一統志」には「永州の南六十里に雷石鎮がある、瀧水口に当たる、唐置く」と言っている。つまり唐の時代の瀧水県はここであったのか、あるいはどこか別の場所であったのか。

時に風向きや風の強さが、とても進むのによい。薄暮に、風に乗って船は灘を一気に遡る。ゴウゴウと逆巻く波の音が雷のようである。五里で瀧に入る。さらに五里で横口に停泊する。瀟江の東岸である。官道が西の岸を走る。ここは雷石鎮の小さな村落である。

永州から双牌に至るのに、陸路では五十里で、水路ではその倍である。双牌から道州に至るには、水路陸路ともに、瀧中を進むことになり、他のルートは無い。だから瀧中の七十里は、流れに沿って下るか、逆らって遡るかの違いがあるだけで、水路陸路の違いはない。瀧を出て道州に至る道として、陸路は小径で水路は湾曲した水路である。